

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2017年2月NO.41

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

ネパールでの

22年の歩み

フィリピンに次ぐ2番目の支援国として、チャイルド・ファンド・ジャパンがネパールでの活動を開始してから22年が経ちます。新しい国での事業の開始、ネパール事務所の開設、そして2015年の大地震…。ネパールでの活動は決して順風満帆ではなく、ヒマラヤ山脈の山道を一步ずつ進んでいくような、紆余曲折の長い道のりがありました。2007年からネパール事務所長を務める田中真理子が、22年間の歩みを振り返ります。



田中事務所長、ヒマラヤ山脈を背に

子どもと女性を優先した支援の開始

フィリピンでの活動を開始して20年が経った1995年、チャイルド・ファンド・ジャパン(当時はCCWA国際精神里親運動部)は、ネパールでの活動を開始しました。支援の必要性、団体の経験などから検討を重ねたうえで、ネパールが第2の支援国として選ばれました。今でもアジアの最貧国の1つであるネパールですが、当時の人々の暮らしぶりは今よりもさらに厳しい状況でした。現在は4%である5歳未満児死亡率が当時は12%だったことから、22年前の子どもたちを取り巻く厳しい環境をうかがい知ることができます。

今そこにある問題を緩和するために、簡単なのは、食料援助などの方法です。しかし、チャイルド・ファンド・ジャパンは、フィリピンでの活動の経験から、ネパールにおいても人々の自立を目指した支援を行うことを決めました。具体的には、「女性の権利の強化」、「女性住民組織の参画の達成」、「乳幼児の生存と発育の保護」の3つを目標にかかげ、子どもと女性を優先した支援を行うこととしました。1995年に「水と子どもの健康プロジェク



当時の栄養改善事業の様子

ト」、1996年に「女性開発計画-住民組織強化プロジェクト」の2つの事業を開始しましたが、本腰を入れて取り組み始めたのは、1996年から2011年まで15年間にわたって実施した「オカルドゥンガ保健事業」です。

オカルドゥンガ保健事業は「病院事業」と「地域保健事業」の2つを柱としています。ネパールにおけるNGO活

動への許可がほぼ皆無の1950年代に活動を開始したネパール合同ミッション(UMN, United Mission to Nepal)というパイオニア的な団体との協働でした。並行して、栄養改善事業などのプロジェクトも実施しました。当時の活動地域では、緑色の野菜には栄養があるにも関わらず、雑草だから子どもには食べさせない、とい

うお母さんも多くいる状況だったので。研修などを通じて、栄養のある食事の作り方や子どもの健康状態のはかり方などを広める活動も行いました。

2006年2月には、ネパール政府と開発支援事業実施に関する一般協定書を交わしました。フィリピン事務所長の経験もあるレイ・マンテが初代所

長に就任し、首都カトマンズにネパール事務所を設立しました。最初はネパール人の会計スタッフと受付、お手伝いさんの4名のごじんまりとした事務所でした。2007年6月にネパールの開発事業の経験のあった私が二代目事務所長となり、スポンサーシップ・プログラム開始の準備を始めました。



ネパール事務所の開所式

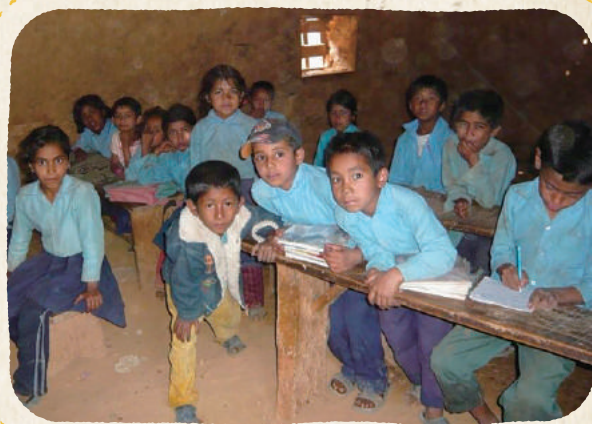
スポンサーシップ・プログラムの開始

スポンサーシップ・プログラムを実施するうえでのパートナーとして、これまでとともに事業を実施した団体が候補にあがったのですが、目指す方向性での違いや地域の治安状況などにより、協働にはいたりませんでした。様々な条件を考慮し、2009年9月にラメチャップ郡で女性への暴力の問題などに取り組んでいたRBPW(Ramechhap Business & Professional Women)と協働することに決めました。RBPWのスタッフとともに各集落で住民集会を行い、経済的指標と社会的指標の2つから、支援を受けるチャイルドを決定しました。

ネパールでスポンサーシップ・プログラムを開始するにあたり、フィリピン事務所からは本当に大きな助けを得ました。私たちネパール事務所のスタッフがフィリピンに学びにも行き、フィリピン事務所からもスタッフ研修のために

ネパールに応援に来てくれました。フィリピンのスポンサーシップ・プログラムを深く理解するにつれ、貧困の度合い、行政サービスの質、文化、開発事業実施環境の違いなどから、フィリピンと同じような支援を行うことは難しいと準備段階から気づいていました。

それでも、チャイルド・ファンド・ジャパンが実施するスポンサーシップ・プログラムとして、子どもの成長を包括的に支えることと、人々の自立を促す長期的な支援という、核となる部分はぶれないようにしました。そして、「子どもには学校を続けることを励まし、



スポンサーシップ・プログラム開始当初のラメチャップ郡の子どもたち

親には子どもの教育に対する関心と責任感を高める働きかけをする」というアプローチをとり、「子どもたちが中等教育を修了し、高等教育の受験資格を得ること」を事業目標に掲げました。東京事務所はネパールのためのキャンペーンを展開しました。そして、多くの皆さまがネパールの子どもたちへのご支援をお申し出くださり、私たちは300名のチャイルドへの支援を開始しました。

2015年度までのスポンサーシップ・プログラムの成果を数字で見ると、高等教育の受験資格を得たチャイルドの割合が0%から72%(全国の公立校の平均は10-20%)に、年間の出席率が70%以上のチャイルドの割合が67%から92%に、学年末の成績が45%以上で進級したチャイルドの割合が36%から77%に増加したことが分かりました。また健康面でも改善があり、栄養不良のチャイルドの割合が14%から0%に減少しました。



地域の人々にスポンサーシップ・プログラムの説明をするネパール事務所のスタッフ

支援地域の拡大とネパール大地震



2011年の一般協定書と事業合意書の5年間の更新においては、ネパール政府から事業地の拡大が求められました。2012年にシンドゥパルチョーク郡を新たな事業地とし、GMSP(Gramin Mahila Srijansil Pariwar)とTUKI(Tuki Association Sunkoshi)という2つのNGOとのベースライン調査を経て、2014年から「子どもを守るコミュニティ形成プロジェクト」を開始しました。

そして2015年4月25日、大地震が発生しました。地震が起きてからの1,2ヵ月間のことは、あまり記憶がありません。何をしていたかよく思い出せないのです。ただ、5月12日に起きた本震以降最大の余震のことは覚えており、次のような手記も残っています。「協力団体のスタッフもカトマンズに集まり、会議を行っている最中に激しい揺れがおそそう。家族、特に子どもの安否が確認できないスタッフは、パニック状態



ヤギの飼育、販売によって収入向上を目指すヤギプロジェクト

ネパールでの活動年表

1995	UMN(United Mission to Nepal)の「水と子どもの健康プロジェクト」への支援を開始(1996年終了)。 ネパール政府地方開発省女性開発課の「女性開発計画一住民組織強化プロジェクト」への支援を開始(1997年終了)。	2010	300名のチャイルドを支援するスポンサーシップ・プログラムをRBPWと開始。また、「子どもにやさしい学校環境整備プロジェクト」を開始(2016年終了)。 「ネパール保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによるネパールの女性と子どもの栄養改善計画」のフォローアップ事業をパルパット郡保健事務所をパートナーとして実施(2011年終了)。
1996	UMNの「オカルドゥンガ保健事業」への支援を開始(2006年終了)、2006年からはHDSCS(Human Development and Community Services)の「オカルドゥンガ保健事業」への支援を開始(2011年終了)。	2011	ネパール政府との一般協定書・事業合意書を更新。
2000	UMNの「栄養改善事業」への支援を開始、2003年からはUMNから分離したNPCS(Nutrition Promotion and Consultancy Service)の「栄養改善事業」への支援を実施(2008年終了)。	2012	シンドゥパルチョーク郡でGMSP(Gramin Mahila Srijansil Pariwar)とTUKI(Tuki Association Sunkoshi)をパートナーとして「新支援地域スタートアップ・プロジェクト」を開始(2013年終了)。
2006	ネパール政府との一般協定書・事業合意書を締結。 レイ・マンテを初代事務所長として、ネパール事務所を開設。 NPCSをパートナーとして、JICA草の根技術協力事業(パートナー型)の「ネパール保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによるネパールの女性と子どもの栄養改善計画事業」を開始(2009年終了)。	2013	シンドゥパルチョーク郡でGMSPとTUKIをパートナーとし「子どもを守るコミュニティ形成プロジェクト」を開始、2016年からは「子どもを守るコミュニティ形成プロジェクト(第2期)」として継続中。
2007	2代目事務所長に田中真理子が就任。	2014	8月2日に大規模な地滑りが発生し、GMSPとTUKIと「ネパール地滑り災害緊急支援」を実施(2015年終了)。
2008	Aasaman Nepalをパートナーとして「故細野雅央様からのご寄付による教育支援プロジェクト」を開始(2011年終了)。同時に、「アマルプール小学校建設プロジェクト」も同団体と実施(2009年終了)。	2015	4月25日にネパール大地震が発生し、シンドゥパルチョーク郡においてGMSP、TUKIと、ラメチャップ郡においてRBPWと、「ネパール大地震緊急・復興支援」を開始(継続中)。アイリーン・サンチアゴがネパール地震緊急支援チームリーダーに就任。
2009	ラメチャップ郡にてRBPW(Ramechhap Business & Professional Women)と「スポンサーシップ・プログラム・スタートアップ事業」を開始(2010年終了)。	2016	ネパール政府との一般協定書・事業合意書を更新。 シンドゥパルチョーク郡でTUKIをパートナーとして379名のチャイルドを支援するスポンサーシップ・プログラムを開始。

になる。電話がつながらず、『私の子どもたちが』と泣き続ける女性スタッフ。4月の地震で妹を亡くしている男性スタッフは、泣きながら電話をかけ続けている。もちろん会議は中止。」

食料の配布から始まって、仮設住宅のための資材の配布、チャイルド・センター・スペースの運営、仮設教室の建設、トイレ・水道の整備、冬の防寒対策など、多岐にわたる緊急・復興支援

を実施してきました。ご寄付をお送りくださった皆さまに深く感謝いたします。同時に、自らも家族を失ったり、家が全壊した被災者でありながらも、緊急・復興支援を進めてくれたネパール事務所と協力団体のスタッフにも感謝しています。

★ 仮設の住まいのための
★ 資材も配布しました



これから

大地震の発生から、もうすぐ二年が経とうとしています。支援の内容も「緊急」から「復興」に移行し、急ピッチで校舎の再建を進めています。事業地では、政府の支援が遅れ、まだほとんどの人たちがトタン屋根の仮設の住まいで生活しています。政治的状況が不安定な中で進む復興では貧富の格差の拡大が懸念されます。若者の間には閉塞感も見られます。それでも、ネパールの将来を作っていくのは、私たちが支援しているような子どもたちです。

カルパナというチャイルドのことを時々思い出します。詩を書くのが好きな女の子で、私たちが家を訪問した際、「私たちは貧しい。けれど家族で仲よく楽しく暮らしている。私は女の子。でも、女の子でも親を助けられる、社会に役立てる」という自作の詩を朗読してくれました。それを聞いたお母さんは、泣き出して

しまいました。高い教育を受けた人しか作れないと思っていた詩を自分の娘が作り、それも普段は引っ込み思案で自分の考えをあまり両親にも言わなかったカルパナが、いつのまにか物事を深く考え、主張できる娘に成長していることに驚いたのです。このような変化の一部に、スタッ

フの家庭訪問や子ども集会が貢献したのかもしれませんが。人が変わるのには、何気ない言葉、ちょっとしたきっかけかもしれません。支援を通して一人ひとりの子どもの将来に影響を与える



ネパール事務所のスタッフと集合写真

ことができるのは、開発事業の醍醐味であり、また同時に背筋が寒くなる思いをすることもあります。

さて、最後になりましたが、私は2017年5月末をもってネパール事務所長を退任いたします。現在、ネパール地震緊急復興支援チームリーダーを務めるアイリーン・サンチアゴが後任に就く予定です。アイリーンはフィリピン、ネパール以外の国でも開発・緊急支援の豊富な経験があり、チャイルド・ファンド・アライアンスのメンバーとの交流も深く、加えて会計管理の専門家でもあります。緊急・復興支援の2年間ネパールに常駐することで、ネパールの文化や政府との調整に理解を深め経験を積んだ彼女が、今後ネパールでの活動の質をさらに高め、これまで以上に多くの子どもたちに支援の手をさしのべることを期待しています。皆さまの引き続きのご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。



アイリーン(右)とネパール事務所の前で

震災後の声

ネパール支援地からの報告

大地震から1年半が経過した2016年10月。支援地域であるネパール東部のシンドウパルチョーク郡を訪問しました。2016年4月から新たにスポンサーシップ・プログラムを開始した地域です。チャイルドたち、家族、学校の先生、現場スタッフの声をご報告します。

支援地域の拡大とネパール大地震

カトマンズから乗ったジープが、校舎の再建に使われるであろう鉄筋を積んだトラックを何度も追い越す。泥土の固まった急こう配の山道を登ってようやく着いた丘陵地の高みにある学校は、子どもたちの集まる明るい磁場としての役割を取り戻しつつあった。

どこの学校でも、校舎の再建、改修が進んでいた。地元の労働者たちが鉄筋を柱にしてレンガを積み重ね、セメントで固めていく。校舎はこの冬の間には完成すると言う。そうすれば、暗くて寒い仮設教室ではなく、チャイルドたちの歓声がより大きくあふれる学校になるだろう。

チャイルドたち、家族、学校の先生、現場スタッフに今、どんなことを思うのか、きいた。

ちょうど先週起きた余震が怖かったと話すチャイルド。地震で家を失い、仮の住まいから早く元の家に戻りたいと願う家族。地震で倒壊した家の下敷きになった人たちを見たことがトラウマになってしまった自分の子どものケアを十分できずに苦しんだ現場スタッフの姿があった。それでも



仮の住まいで生活するチャイルド

チャイルドたちは、学用品をもらって嬉しかったことや、スポンサーさんからの手紙でとても慰められ、返事に家や花や小鳥の絵を送ったことを話してくれた。また、ある学校の校長は、カトマンズで働いていたが、地元の教育に貢献したいと願って帰ってきたという。スポンサーシップ・プログラム

の良き理解者でもある。

地域にある協力センターには、支援を待つ子どもたちのプロフィールが整理されて安全に保管されていた。チャイルドたちの学びたい気持ちを実現するために、一人でも多くの支援者が加わってくださるよう、自らの使命を改めて自覚した訪問だった。



セメントで固める前のレンガの壁面



支援地域の学校を訪問するスタッフ



(報告:支援者サービスチーム 大原 哲雄)

フィリピンからクムスタ vol.6



タグラグビーを知っていますか？

クムスタ:フィリピン語で「こんにちは」

タグラグビーは、1990年代のはじめにイギリスで始まった新しいラグビーです。ラグビーと同じような楕円形のボールを使用しますが、身体接触や地面に倒れるプレーを禁じているため、タックルの代わりに、相手選手の腰に付いているタグ*1を取るのがルールです。「誰でも活躍できて、たくさんの運動量が得られる」スポーツと言われる、子どもでも楽しく安全にプレーできます。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、チャイルド・ファンド・オーストラリアと協働して、支援プロジェクト「パス・イット・バック (Pass It Back, PIB*2) ~タグラグビーで子どもの成長を支えるプロジェクト~」を開始しました。「パス・イット・バック」は、「リーダーシップ」、「ジェンダー平等」を軸に、チームスポーツであるタグラグビーを取り入れ、困難に立ち向かう力を身につける学習プログラムです。

参加した子どもたちが地域を変える主体として活動し、ラグビーボールをパスするようにこのプログラムを同世代・次世代の子どもたちに引き継いでいくことを目的としています。2月からフィリピン、ネグロス島で若者を対象とした「パス・イット・バック」のコーチ研修が始まりました。このプロジェクトの詳細は随時、機関紙やウェブサイトなどでご報告していきます。



コーチ研修の様子

*1 腰にベルトをまきます。そのベルトの左右にはワンタッチテープがついていて、両わきに2本の帯状のタグ(リボン)をつけます。

*2 ラグビーのルールによりボールを前にパスすることはできません。必ず後ろにパスします。

スリランカからアーユボーワン vol.18



一番楽しかったこと

アーユボーワン:シンハラ語で「こんにちは」

スリランカのチャイルドたちに、この1年で一番楽しかったことは何かを訊きました。一番多かった回答は……修学旅行・遠足でした。

スリランカのスポンサーシップ・プログラムでは、チャイルドの視野を広げる目的で修学旅行を実施しており、仏跡を訪問したり、お寺や建造物を見学したり、景勝地を回ったりします。

- 学校の遠足にきょうだいたちとお母さんと一緒に行ってきました。象の孤児院*1にも行きました。とても楽しかったです。たくさんの子象に会いました。水浴びも見ました。私たちがどれほど遠足を楽しんだかを知ったら、スポンサーさんもきっと喜んでくださると思います。
- 仏陀の歯の遺物が収められているお寺*2に行きました。また、マヒヤンガナヤに先住民*3の人たちの暮らしを見に行きました。それから、水力発電所も行きました。
- 保護林に行って、森林の中にある宿泊所に泊まりました。ぼくにとって忘れられない日になりました。滝を見て、その美しさを感じました。



「出発進行!」お出かけ前のチャイルドたち

*1 スリランカには野生の象がおり、群れからはぐれた子象を飼育している施設があります。 *2 町全体が世界遺産に登録された中部の町キャンディに、仏歯寺があります。

*3 スリランカの先住民族ヴェッタ族などが暮らしています。

お願い

書き損じた年賀状で
ネパールの子どもたちを支援しよう!



仮設教室で勉強する子どもたち

今年も、ネパールの子どもたちが楽しく安心して学べる学校環境を整備するためのキャンペーンを実施しています。ご家庭にある書き損じハガキや年賀状、未使用の切手をどうぞお送りください。いただいたハガキや切手は、2015年4月25日に発生した大地震で被害を受けた、ネパールの子どもたちの教育支援のために活用されます。書き損じた(未使用の)ハガキや年賀状は、25枚で辞書1冊に、100枚で算数の学習セット1セットに変わり、ネパールの学校に届けられます。

○ 集めているもの

未使用の(書き損じた)年賀状、官製ハガキ(郵政ハガキ)、未使用の切手

× 集めていないもの

使用済みの切手、外国切手、私製ハガキ(切手を貼らないと使用できないハガキ)、料金受取人払郵便のハガキ、テレホンカード、印紙

<書き損じハガキの送付先>

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
チャイルド・ファンド・ジャパン ハガキ係

ChildFund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に
基づいて活動します。

チャイルド・ファンド・アライアンス

ChildFund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

お知らせ

領収証の発送が完了しました

2016年にいただいたご寄付の領収証の発送が完了いたしました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「認定NPO法人」に認定されており、ご支援くださる皆さまには、所得税、法人税、相続税などの税制上の優遇措置を受けていただくことができます。特に個人の方がチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をした場合、最大で寄付金額の約40%を、所得税から控除できるようになりました。この税額控方式では一般的に、これまでの所得控除方式より大きな減税効果が見込まれます。

詳しくは「寄付金控除について」のページをご覧ください。

<https://www.childfund.or.jp/support/deduct.html>

チャイルド・ファンド・ジャパン 寄付金控除

検索

お知らせ

子どものための防災冊子
「みんなの仙台防災枠組」が発行されました!

2015年3月、仙台において国連防災世界会議が開催され、「仙台防災枠組」が採択されました。この枠組では、災害弱者(子ども、女性、障がい者など)がおかれた状況をふまえ、世界各国が2030年までに取り組むべき防災・減災の課題が示されています。

チャイルド・ファンド・アライアンスは、仙台防災枠組を子ども向けに解説した冊子を作成しました。災害から子どもたちを守るためには、子どもたち自身が自分たちでできることは何かを考え、意見を出し合い、主体的に地域の防災の取り組みに参加することが大切です。この冊子を通じて、こうした取り組みを支えていきます。

冊子の日本語版「みんなの仙台防災枠組」を他団体*と協働して発行しましたので、ご家庭や学校での防災活動の際にぜひご活用ください。冊子をご希望の方は、事務局までお問合せください。また、PDFファイルをホームページよりダウンロードすることができます。

*国連国際防災戦略事務局(UNISDR) 駐日事務所、国連児童基金(ユニセフ)、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン、特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

<https://www.childfund.or.jp/files/SFDRR.pdf>

みんなの仙台防災枠組

検索



ビジョン(目標)

すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る

スマイルズ

<チャイルド・ファンドだより SMILES> 2017年2月発行

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5

理事長/高田和彦 事務局長/和山正秀

TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730

E-mail: childfund@childfund.or.jp

URL: <https://www.childfund.or.jp/>

<デザイン>

モステデザイン研究所

(印刷)

有限会社東西印刷

